鼎談「生き方としての哲学
――ピエール・アド『ウィトゲンシュタインと言語の限界』をめぐって」

合田　正人 × 古田　徹也 × 池田　喬

2024 年 3 月 1 日（金）の 17 時から 19 時にかけて、明治大学駿河台キャンパス・グローバルフロント 17 階グローバルラウンジにて、「鼎談　生き方としての哲学――ピエール・アド『ウィトゲンシュタインと言語の限界』をめぐって　合田正人×古田徹也×池田喬」が行われた。この鼎談は明治大学心理社会学科哲学専攻の池田喬の企画により、当専攻内に設置された Meiji Institute of Philosophies (MIPs)のイベントとして開催された。以下は、事前の告知と当日の配布用に作成した資料に載せた文章である。

20 世紀フランスの古代哲学研究者であった P. アド（1922-2010）はフーコーに見出され、フーコーと比較されてきた。「古代哲学全体が、発語の存在論的価値と呼びうるものを信じていた。「生き生きとした活力ある」言説が弟子の魂を変容させるものである」。魂を変容させるこのような「生き方としての哲学」は 20 世紀の哲学にはもはや存在しないのだろうか。

そうではない。上記の引用文は、昨年翻訳刊行された『ウィトゲンシュタインと言語の限界』に現れるものである。1960 年代前後にフランスで初めてウィトゲンシュタインについて語られたとも言われるこの書において、アドは、ウィトゲンシュタインを 20 世紀以降の分析哲学や論理学の領域だけでなく、それよりもむしろ、古代懐疑主義、ストア派、ゲーテ、ショーペンハウアーを含んだ西洋哲学史の全体に位置付けていた。そして、アドが、ウィトゲンシュタインに近い現代の哲学者として挙げるのは、ハイデガーやメルロ＝ポンティといった現象学者である。

現代哲学の全体を再考させるに十分なインパクトを放つ、アドのこのウィトゲンシュタイン論について、本書の翻訳者である合田正人、本書の解説を著したウィトゲンシュタイン研究者である古田徹也、この集まりの企画者でありハイデガー研究者の池田喬による鼎談を開催する。生き方としての哲学、魂の変容としての哲学という、現代において失われつつあるようで、現代の最大の哲学者とよく並び称される二人――ウィトゲンシュタインとハイデガー――に共有されていたと見られるそうした哲学のあり方についても話し合いたい。

参考文献

アド、P. 『ウィトゲンシュタインと言語の限界』（合田正人訳、古田徹也解説）、講談社、2022 年.
アド、P.『生き方としての哲学－J.カルリエ，A. I.デイヴィッドソンとの対決』（小黒和子訳）、法政大学出版局、2021 年.
アド、P.『イシスのヴェール－自然概念の歴史をめぐるエッセー』（小黒和子訳）、法政大学出版局、2020 年.

以下は当日の鼎談の記録である。鼎談後のフロアとの質疑応答については各質問者に確認の連絡を取ることが困難であるため、残念ながら割愛した。

アド『ウィトゲンシュタインと言語の限界』について

池田：まず、本日の鼎談の趣旨を確認したいと思います。配布資料「鼎談 生き方としての哲学――ピエール・アド『ウィトゲンシュタインと言語の限界』をめぐって」をご覧ください。資料の趣旨文をちょっと読ませていただきます。

> 20 世紀フランスの古代哲学研究者であった P. アド（1922-2010）はフーコーに見出され、フーコーと比較されてきた。「古代哲学全体が、発語の存在論的価値と呼びうるものを信じていた。「生き生きとした活力ある」言説が弟子の魂を変容させるものである」。魂を変容させるこのような「生き方としての哲学」は 20 世紀の哲学にはもはや存在しないのだろうか。

「古代哲学全体が～」というこの引用文は『ウィトゲンシュタインと言語の限界』に現れるものです。そして、アドは、魂を変容させる「生き方としての哲学」が 20 世紀にも存在する、つまりウィトゲンシュタインの哲学がそうだと言いたいわけです。

このウィトゲンシュタイン論は 1960 年代前後にフランスで初めてウィトゲンシュタインについて語ったものだといわれています。ウィトゲンシュタインは、20 世紀以降の論理学や分析哲学の文脈で論じられる傾向がありますが、アドはむしろ、古代懐疑主義、ストア派、ゲーテ、ショーペンハウアーを含んだ西洋哲学史の全体にウィトゲンシュタインの思想を位置付けています。また、アドがウィトゲンシュタインに近い現代の哲学者として挙げるのは、分析哲学者ではなく、ハイデガーやメルロ＝ポンティといった現象学者です。現代哲学の全体を再考させるに十分なインパクトを放つ見方ではないでしょうか。そこで今日は、ア

ドのウィトゲンシュタイン論について、本書の翻訳者である合田正人さん、解説を著したウィトゲンシュタイン研究者である古田徹也さん、それからハイデガー研究者の私で話し合いたいと思います。

私と古田さんのあいだということでいえば、現代の最大の哲学者とよく並び称されるウィトゲンシュタインとハイデガーに共有されていたと思われる哲学の在り方についても、生き方としての哲学とか魂の変容としての哲学という観点から、少しでも明らかにできればというふうに思っております。

では、まずアドという人物について簡単に確認しておきたいと思います。

今日のテーマは『ウィトゲンシュタインと言語の限界』ですが、この本の前に法政大学出版局から、小倉和子先生による翻訳が二冊出版されています。一つは 2021 年の『生き方としての哲学――J. カルリエ、A. I. デイヴィッドソンとの対話』、もう一つが 2020 年の『イシスのヴェール――自然概念の歴史をめぐるエッセー』です。ですから 2020 年代に入ってから、立て続けに三冊の翻訳が出ているということになります。

先ほどフーコーと並び称されてきたという話がありました。自分は古代哲学研究という観点からフーコーと並べられることがあるが、フーコーと自分の学問的な方法は違う、ということを『生き方としての哲学』でアド自身が述べたりしています。また、古代哲学研究者としてのアドということでいうと、今日いらっしゃっている上智大学の荻野弘之先生が、2009 年に岩波書店から出版された、『マルクス・アウレリウス『自省録』――精神の城塞』でその仕事を大きく取り上げていらっしゃいます。

荻野先生の本は 2009 年に出ているのですが、他方で、『ウィトゲンシュタインと言語の限界』の合田さんの「訳者後記」を見ますと、「訳者がピエール・アドの著作を初めて読んだのは、というよりも、むしろアドという哲学者の存在を初めて知ったのは 2012 年」とあります。アドのことを知ったのは比較的最近なんですよね。私にはこれがちょっとした驚きでした。フランスの思想家、フランスの現代思想のあらゆるものに目を配り、翻訳を刊行してきた合田さんがアドを 2012 年まで発見していなかったということに。合田さん、そうですよね。

合田：そのとおりです。

池田：けれども、訳者後記をさらに読んでみると、「アドはフランスにおいて極めて広い読者を獲得していた。さまざまな哲学者たちがアドという古代哲学の研究者の『生き方としての哲学』とか霊操といったアドの決まり文句を浸透させていった」とあります。そういう強い影響力を持っていたということも、また同時に発見されたということなんですよね。

というわけで、どう進めましょうか。最初に合田さんのほうからこの本を翻訳したきっかけというか、フーコーに並べられるほどの経歴と実力を備えているアドがなぜ隠れていたのか、合田さんがアドをどう見いだしてどうして翻訳することになったのか、というあたり

の事情をまずお話をしていただくのがいいかなと思います。

合田：分かりました。では、私のほうからまずお話をさせていただきますが、不覚にも台北で負傷してしまいまして、遠隔での参加となりましたこと、お詫び申し上げます。拙訳が出たとき、古田さんの解説は素晴らしいが、日本のウィトゲンシュタイン研究の水準はとても高くて、アドの解釈など大したことないという感想を目にしました。嫌味な言い方だなと思ったのですが、この方は結局、古田さんがアドの解釈の価値を認めておられることを肯定しているわけで、アドに代わってとは言えないにせよ、古田さんには、素晴らしい解説を書いていただいたことに心から感謝申し上げます。

ピエール・アドの『ウィトゲンシュタインと言語の限界』は 2022 年に出版されましたが、翻訳を誰から頼まれたわけでもなく、また出版の当ても全くない状態でとにかくこれはぜひ訳出したいということで夏休みに一気加勢に翻訳しました。いつもそういう仕方で仕事をしているわけでは決してないのですけれども。では、なぜ例外的に私がこの本に飛びついたかをまずお話しさせていただいて、最後に、今日、せっかく古田さんにいらしていただいてますので、古田さんにお伺いしたいことなど質問させていただければと思います。

今、ご紹介にありましたように、私がアドのことを知ったのは 2012 年です。この年は 1 年間パリで在外研究をした年でした。既にアドは 2 年前に亡くなっています。コレージュ・ド・フランスの名誉教授が死去して間もないということもあったのでしょうが、パリの書店を巡ると、アドの圧倒的なプレゼンスを感じざるを得なかったわけです。アドは 1982 年にコレージュ・ド・フランスのヘレニズムとラテン思想講座の教授に就任し、91 年には引退しています。ですから、もっと早く知っていても全くおかしくはなかったのですが、先ほどお話があったように。私は全く知らずにいたわけです。

2004 年にデリダが他界しまして、生き方としての哲学とか、霊操とか、それを標語とするような方向にフランス哲学界ではシフトしたのかなと思いつつ、まず初めに『ソクラテス賛』という小著を読みました。非常に面白い本で並の著者ではないなと確信し、続いてあっという間にほぼすべての著作を読みました。

古代哲学についての著作は、私が無知であるだけに非常に学ぶところが多かったですし、また先ほどご紹介のあった鼎談『生き方としての哲学』ですね、これはアドの生い立ち、修学時代に加えて、モンテーニュとかあるいは現代だとジャンケレヴィッチとか私自身日常関わっている哲学者、著述家とアドとの知的な交渉が語られていて極めて興味深いものでした。

池田さんに指摘されるまでライナー・シュールマンが出ているところは読み飛ばしてしまっていて気づかず、お恥ずかしい限りです。しかし、Wittgenstein et les limites du langage を見つけた時は格別に興奮しました。たしかに『古代哲学とは何か』の冒頭でも『イシスのヴェール』でもウィトゲンシュタインは話題になっているので驚くことではないのかもしれなのですが、今から申し上げるような事情でこれには多大なインパクトを受けたわけです。

2004 年にこの本は出ているのですが、私が別の文脈でずっと探し求めていたことの答えになるかもしれないものがそこに収録されていた、そこに書かれていたのです。この小著には、1959 年 4 月 29 日にコレージュ・フィロゾフイックでアドが行った講演が第一論文として収められています。コレージュ・フィロゾフィックというのは、サント = ジュヌヴィエーヴの丘でジャン・ヴァールという哲学者が主催していた私的講演会で、レヴィナスがそこで『時間と他なるもの』を初めとして幾度も講演を行ったことをご存知の方も多いのではないでしょうか。

アド自身このことを重視してるようで、マリアンヌ・レスクーレという人の書いたレヴィナスの伝記からコレージュ・フィロゾフィックに関連する箇所を引用しています。この伝記、残念ながら翻訳はまだ出ていません。1940-50 年代、レヴィナスは大学とは無縁でしたから、大勢の聴衆に向けて講義をする機会がありませんでした。それを提供したのがジャン・ヴァールであり、コレージュ・フィロゾフィックだったのです。47 年から 64 年にかけてレヴィナスは 20 本近い講演をそこで行いました。レヴィナス全集の第 2 巻に重要なものが入っておりますのでぜひご覧ください。さて、そうだとしますと、これは何の確証もないのですけれども、アドのウィトゲンシュタイン講演をレヴィナスが聴衆の一人として聴いていたという可能性もゼロではないと思い至ったのです。

ちなみにアドは、戦後間もなく、1946 年ごろには、先ほど名前を挙げたジャン・ヴァールは確実にウィトゲンシュタインのことを知っていたと述懐しています。おそらく、アメリカ亡命時代にウィトゲンシュタインについての情報を得たのではないかと思われます。ジャン・ヴァールという人はとにかくあらゆる主題に関心を抱いた人でした。1958 年にはロワイモンというパリの北部の古城で分析哲学についてシンポジウムを開催して、イギリスの哲学者たちとフランスの哲学者たちの出会いの場をつくった人でもあるんですね。そこでもウィトゲンシュタインが話題になっています。また、アドにウィトゲンシュタインの講演を依頼したのもヴァールであったということです。アドの講演と同じ年に、アルベール・シャロームという学者もウィトゲンシュタインについての講演をコレージュ・フィロゾフィックで行っています。

ご存じのように、レヴィナスの博士論文『全体性と無限』の指導教官はジャン・ヴァールでした。『全体性と無限』が出版された 1961 年に、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』のフランス語訳も出ています。翻訳者はピエール・クロソウスキーという作家・画家でした。『ニーチェと悪循環』で有名ですね。会場にいればお回しできたのですが、フランスにおけるウィトゲンシュタイン受容については James Helgeson という人の"Notes on Early French Wittgenstein Reception"という論文がありますので、ウェブでご覧になってください。

実を言いますと、何十年も前から、私はレヴィナスやジャンケレヴィッチを論じる際に、レヴィナスとは非常に異質なはずなんだけれども、なぜかそこに取り憑いてくるというのでしょうか、そのような思想家として私はウィトゲンシュタインのことを考えてきました。その点ではアド自身の「方法」も似たところがあるかもしれません。例えばメルロ = ポンテ

ィとウィトゲンシュタインという大変異なった 2 人の哲学書を比較していますね。メルロ＝ポンティだけではなくて、先ほど池田さんから話がありましたけれども、『言語の限界』では、ダマスキオスのような新プラトン主義の思想家との連関が語られる一方で、サルトル、エリック・ヴェイユ、ブリス・パランなどが取り上げられています。それも私にとってはこの書物の大きな魅力でした。そんな比較してどうするんだと言う人もいらっしゃるかもしれませんが。

ジャンケレヴィッチはというと、私の知る限り一度もウィトゲンシュタインには言及していません。ですが、考えてみますと ineffable, inexprimable, indicible といったジャンケレヴィッチのキーワードはまさに「語りえないもの」に係るものですよね。この点は、2014 年にみすず書房から出版した拙著『ジャンケレヴィッチー――境界のラプソディー』で少し論じたことがあります。また、ジャンケレヴィッチはショーペンハウアーを継承する音楽の哲学者でもありました。この点、もしかすると後の話と係ってくるかもしれません。

レヴィナスのほうは、おそらく一度だけウィトゲンシュタインに言及しています。1976 年に書かれた小論「意味についての覚書」――これは『観念に来たりし神について』という論文集に収められています――のなかで、「ウィトゲンシュタインによると問いは答えが可能なところでしか可能ではない」と言っているのです。『論理哲学論考』の 6・5 でしょうか、それを踏まえた言葉ですね。レヴィナスは『論理哲学論考』のこの命題を否定するために引用しています。それが否定になってるかどうかは別といたしまして、非常に小さな一度だけの言及ですから、レヴィナス研究者も最近までほとんどそこを取り上げることはありませんでした。しかし、いずれにしても、何らかの仕方でレヴィナスが『論理哲学論考』の少なくとも一部について知識を持っていたということは間違いありません。

もう一つ、ウィトゲンシュタインの名は記されていないのですが、その 2 年前、74 年に出版された『存在するとは別の仕方で　あるいは存在することの彼方へ』の第 1 章には次のような一節があります。「〈語ること〉の自己背信を代償として、すべては現出する。語りえないもの、indicible さえが現出する。だからこそ語りえないものを漏洩することも可能になるのだが、語りえないものの秘密を漏洩すること、おそらくはそれが哲学の使命に他ならない」。これも「語りえないものについては沈黙しなければならない」というウィトゲンシュタインの言葉あるいはその姿勢への反駁であるのは明らかです。ただ、これも反駁になってるのかどうか、おそらくなってないんじゃないかとは思うんですけれども、ともかくこういう箇所が第二の主著のなかにあるのです。

偶々見つけたのですが、1963 年に出版された『三つのヘーゲル研究』というアドルノの本を読んでいた時に、ほとんどレヴィナスと同じことをアドルノがそこで言っていたので一驚いたしました。アドルノはこんなふうに言ってます。「《語りえないものについて沈黙しなければいけない》というウィトゲンシュタインのモットーは、まったく反哲学的である。哲学というものは、語りえないものをなんとか語ろうとする努力であると定義できないだろうか。言いかえるなら、一方では表現がいつもそれを同一化してしまうのに、非同一的なも

のに手を貸して、なんとかそれを表現しようとする努力と定義できないだろうか」と。この点は、ちくま学芸文庫から出ている拙著『レヴィナスを読む』ですでに語りましたが、後でエリック・ヴェイユもほとんど同じようなことを言ってるのを知りました。

アドルノの指摘も反論になってるかのどうか、その点は別にして、しかし、このようにレヴィナスとアドルノが異口同音にウィトゲンシュタインの有名な言葉について反駁していたというのは私にはどうも偶然には思えないのですね。もちろん口裏を合わせていたとか何か影響関係があったっていうことではありません。あえて仮説を提示しておきますと、アドルノはよく「像の禁止」ということを言いますね。いわゆる偶像の禁止です。像の禁止という時の像は Bild です。Bild は image, figure, représentation 等々さまざまに訳されますが、この問題がアドルノとレヴィナス両名に、いや、ウィトゲンシュタインにも取り憑いていたのではないか、それが今日私が最も話したいことなのです。

すみません、もう少しだけ話させてください。

池田：はい。

合田：アドの仕事はおそらくアメリカ合衆国では非常に早い時期に受け入れられていたのではないかと思います。例えばヒラリー・パトナムがアドの影響を受けて『生き方としてのユダヤ教』(2008)というのを書いています。そこではブーバー、ローゼンツヴァイク、レヴィナス、ウィトゲンシュタインというユダヤ系哲学者たちが取り上げられている。非常に象徴的ですよね。法政大学出版局から翻訳が出ていますのでご覧ください。

2024 年は実は『存在するとは別の仕方で』出版からちょうど 50 年の年なのですね、7 月に明治大学の哲学専攻でもシンポジウムを予定しているんですけれども、この本を読み直していく過程で、先ほど挙げた「語りえないもの」に加えて、「命題」(apophansis)、そして「懐疑論」がこの本の鍵を握るものであることに改めて気づきました。今のところ、誰もなぜ「懐疑論」がここで出てくるのかを解明した人はいないのですが、他にもいろいろウィトゲンシュタインとの繋がりが出てくる可能性があるのではないかと思っています。

最後にこの点で申し上げておくと、ラッセルに宛てた書簡のなかでウィトゲンシュタインが、「亡霊のざわめきのなかに理性の声をようやく聴けるようになった」と言っているところがあって、これ、大変印象的な言葉なんですけれども、これこそおそらくレヴィナスの言う「イリヤ(il y a)のざわめき」なのではないかと思うのです。元々、「イリヤ」は亡霊たちの現前を指していたのですから。

ここでいったんお話を終わらせていただきます。以上、アドの書物と私が出会った経緯と、なぜそれに私が非常に関心を持ったのかということでした。もう一度申し上げますけれども、Bilderverbot というんでしょうか、「像の禁止」についてまた後でお話を伺うことができればと思っております。

池田：ありがとうございます。ウィトゲンシュタインの話が出てきましたので、その話に絡めて古田さんにも話を振っていきたいと思います。一つのテーマは、フランスにおけるウィトゲンシュタインの受容ですよね。レヴィナスはいつウィトゲンシュタインの何を読んでいたのか、そうであったとしたらレヴィナスにはウィトゲンシュタインからのどういう影響があったのか、といった話題です。これは難しい問題ですが、ともかくはっきりしているのは、アドのウィトゲンシュタイン論は、フランスで、初めてかどうかは分からないんですけど、かなり早い時期にウィトゲンシュタインを紹介したものであり、この点で大きな意義がある、と。このことはたしかに言えるわけですよね。

古田：そうですね。アド自身はだいぶつつましく言ってますけど、ここまできちんと扱っているという意味では、間違いなく最初期ですね。

アドのウィトゲンシュタイン解釈

池田：では、そのことも踏まえてアドによるウィトゲンシュタイン解釈の独自性に話を進めたいと思います。先ほど合田さんから、1958 年に分析哲学のシンポをジャン・ヴァールが開いてイギリスとフランスの哲学者たちが出会ったという話がありました。アドのウィトゲンシュタイン解釈はその後登場したわけですが、その解釈は、イギリス、あるいは英語圏で議論されているウィトゲンシュタインとはかなり違ったウィトゲンシュタイン像を提示するものであった、と、そういうことでしょうか。

古田：そうですね。ただ、例えば、アンスコムやフォン・ウリクトといった、ウィトゲンシュタインと非常に近かった人々、また、彼と直接の面識はないピーター・ウィンチなども含めて彼のテクストをよく読めている人々の解釈には、かなり近かったと思います。深いところで通じ合うものがあったんじゃないかと。

池田：その点は興味深いですね。アンスコム、ウリクト、ウィンチはウィトゲンシュタインの精神をかなりダイレクトに受け取ってる人だと私は思っています。そういう人たちにアドは近い、ウィトゲンシュタインの解釈において近いところがあると思うわけですね。

古田：あると思います。

池田：一応確認ですが、アンスコムとかウリクトのような人たちのウィトゲンシュタイン解釈とは異なるウィトゲンシュタイン解釈を示した人たちとしては論理実証主義者のことを

考えればよいですか？

古田：そうですね。それこそ論理実証主義者による『論考』解釈などと比べると、だいぶ違うのは間違いないです。

池田：そうすると、どういうふうにアドのウィトゲンシュタイン『論考』解釈とアンコスコムやウリクトたちのウィトゲンシュタイン観が近いのでしょう。この点については今日の古田さんの資料を見ると分かるのでしょうか。

古田：そうですね。一応、そのほうが分かりやすいかもしれないですね。要するに、「語りえないものについては沈黙しなければならない」という命題を、論理実証主義者たちは端的に否定的な命題というか、むしろ、ある種、科学的な世界観というのを打ち出していくに当たって、自分たちにとっては味方になるような、自分たちに道筋を示してくれるような言葉として受け取ったわけです。しかし、まさにアドがそうであるように、あるいはウィトゲンシュタイン自身も言っているように、むしろそれはカント風に言うと信仰に場所を空けるための言葉にほかならない。『論考』において最も重要なのは、まさに語らなかった部分あるいは語りえなかった部分だ、というふうに本人も後に言っていますね。

つまり、論理実証主義者とアドは、「語りえないものについては沈黙しなければならない」という同じ命題を見ているんだけど、見えている相貌が違うということですね。

今回、合田さんの翻訳で読むことができて実感したところですけど、アドには、ウィトゲンシュタイン自身に見えているものと同じような相貌が見えていると思います。そして、なぜ彼にその相貌が見えるのかというと、ある種奇妙ではあるんですけど、アドは哲学史を深く知っていたということがあるんじゃないか。

「奇妙」というのは、ウィトゲンシュタイン自身は哲学史をろくに知らなかったからですね。にもかかわらず、両者の見方や考え方が一致しているのが面白い。アドは、神秘主義や懐疑主義に深く通じていたからこそ、ウィトゲンシュタインがいわば自分自身のなかから生み出した「哲学の素人」の思考を、かなり深い次元で受け取ることができたと思います。

アドによるウィトゲンシュタイン解釈の意義ということで言うと、1 つ目は、この資料に書いたように、哲学史の中にウィトゲンシュタインを適切に位置づけたということです。これは、できるようでなかなかできない。しかも、1959 年の時点でこれができたというのは、驚嘆すべき慧眼だと思います。現在ではたくさんの遺稿や資料がそろっているし、検索にしろ何でもやりやすくなっていますから、ある一節やある単語がどう関係してて、ウィトゲンシュタインが何を踏まえているのか、といったことは跡づけやすいんですけど、当時アドが読むことができたのは、基本的には『哲学探究』と『論理哲学論考』のみです。そこから、ウィトゲンシュタインの思考の特徴や流れといったものを見事に引き出している。これは、例えば論理実証主義者には全くできなかった読み解きですし、哲学史をあまり遡らない分

析哲学的な手法でもたどり着きにくい読み筋だと思います。

アドが『論考』と『探究』以外に触れることのできたウィトゲンシュタインのテクストに『倫理学講話』というものがあるんですが、そこからちょっと引用してみますね。【1-1】と番号を振ったところです。アドはこういうふうに言っています。

「……『倫理学講話』において、ウィトゲンシュタイン自身それはみずからの経験であるとしている世界の実在を前にしての驚きの感情に並ぶものとして、もう一つ別の感情、これまた自分にとって親しい絶対的安心の感情を暗示している……」。世界の実在を前にして――つまり、世界が存在することへの驚きですね。何で世界は存在するんだろうっていう驚き。それから、絶対的な安心――何があっても自分は安全だとか安心だとか何物も自分を脅かさないというようなそういう感情のことです。

「この後者の感情は以下のようにも表現される」と。ちょっと飛ばしますが、アドはこう続けています。「『私は静謐な意識を有している。何が起ろうとも、何も私を傷つけることはできない』。ストア派的な音調を有した表現である。」――ここでアドはさらりと、ストア派の思想とウィトゲンシュタインの思想の親近性を指摘しています。さらに続けると、アドはこう述べています。「ただし、精神的・道徳的悪以外の悪は存在しないと認める者が、自分が望むなら、いかなる悪も自分には到来しえないということも知っている限りで。驚きと安心というこれら二つの感情、これら二つの経験は、情動的経験であるがゆえに十全な仕方で表現することは不可能なのだ……」。――つまり、語りえないわけですね。

「これらは世界の特定の諸対象に対する没利害と無関心という二つの構えを想定しているかぎりで深く連結されている」。これは濃密な表現ですけど、非常に正確に、この周辺の事態を表現している。没利害・無関心というのが、ここではストア派的な音調として効いてくるポイントだと思います。

他方で、例えば後期のほうの『哲学探究』第一部の第 654 説にアドは着目しています。ちょっと紹介します。【1-2】と【1-3】です。

「われわれの誤りは、諸事実を原現象とみなさねばならないところ、つまり、われわれが「ある言語ゲームがなされた」と単に言うべきところで、説明を探すところに存している」。――この箇所の「原現象」というのは、実はゲーテの用語を踏まえています。並の読み手は気づかないのですが、驚嘆すべきことに、アドはこれがすぐ分かるんですね。彼はこの「原現象」はゲーテ由来だっていうことをすぐに見抜いて、ゲーテが次のように述べている箇所を引用してます。「人間が到達しうる至上の点、それは驚きである。人間が原現象を前にした驚きに入り込むとき、人間はそれで満足しなければならない。それ以上に高度なものは何も人間に認められえないし、人間はもっと遠くを探ってはならない。にもかかわらず、人間たちは通常、原現象を観照することで満足することはない。人間たちはもっと遠くにいかなければならないと考え、自分は幼児に似ていると考える。鏡に映る自分を見たあとで鏡を裏返して向こう側があることを確かめようとする幼児に」。――これは、ウィトゲンシュタインになじんでいるといかにもウィトゲンシュタインが言いそうなことに見えるんですけど、

まさにゲーテが言っていることなんですね。

池田：たしかに、このゲーテの言葉は言われないとウィトゲンシュタインの言葉かと思っちゃいますね。

古田：逆に言うと、ウィトゲンシュタインがどれほどゲーテに影響されているか、ということでもあります。

それから、「驚き」ですよね。僕自身、アドのウィトゲンシュタイン解釈を読んで深く共感したのは、驚きの感情をめぐる彼の指摘です。彼によれば、驚きというのは何か隠されたもの――この比喩で言うと、鏡の向こう側にあるもの――に対するものじゃなくて、目の前にあるもの――日常の生活、普通にあるこの世界のありように対するものだ、というんですね。目の前にあるものを驚くべきものとして見る、ということです。

僕も、『はじめてのウィトゲンシュタイン』という自分の本の帯に、「彼は世界を『驚くべきもの』に変貌させる」という言葉を記しました。僕はそういうふうに彼の思想をまとめたわけですけど。アドを読んで、ああ、やっぱり、と思いました。読み筋が一致したという、そういう深い感慨を抱いたのを覚えています。いずれにしても、アドはそうやって、ウィトゲンシュタインとストア派、それから、ウィトゲンシュタインとゲーテの関係っていうものを捉えながら、彼の思想を哲学史のなかに位置づけていくんですね。

例えば、アドは次のようにまとめています。【1-4】です。「われわれはここで間違いなくウィトゲンシュタインの最も深い関心事に触れている。彼にとっては、現実を前にしての驚異がつねに根本的な感情であったのだから。」――僕もまさにそう思います。さらにもう少し。『論考』の懐疑論的な要素も、アドはちゃんと捉えています。彼の本の 23 ページから 24 ページにかけてのところで、こういうふうに言ってます。【1-5】です。「同書の言説全体が、その治療的機能（古代の懐疑論者たちはその哲学的言説を、悪しき気分と共に除去される単なる下剤とみなしていたが、それと同様である）を果たした後で自壊し、かくして無用のものと化した一段階のように棄却されてしまうだろう。そして、それは叡智的生の沈黙に座を譲り、この沈黙のなかで、生にまつわる問題はそれ自身の消滅によって解決されるだろう。」――まさに一筆書きの解説です。『論考』の最終盤の足取りに関する、観にして要を得た素晴らしい記述です。

実際、『論考』でウィトゲンシュタインは何を言ってるか、一応、確認しておきたいと思います。【1-6】ですね。「私の諸命題は、私を理解する人がそれらを通り、それらの上に立ち、それらを乗り越えて、最後に、それらが無意味であることを悟ることによって、解明の役割を果たす。（言うなれば、読者は梯子をのぼりきったら、それを投げ棄てなければならない。）／読者は私の諸命題を葬り去らなければならない。そのとき、読者は世界を正しく見るだろう。／　語りえないものについては、沈黙しなければならない。」

この一節に関連して、資料的なものを紹介しておきましょう。例えば、セクストス・エン

ペイリコスは、ピュロン主義の懐疑主義の代表的な人物の一人で、たくさん書物を残してそれがよく残ってるということにおいて有名なんですけど、その中の『学者たちへの論駁』において、彼は次のように言っています。【1-7】を見てください。

まず前提として、古代懐疑主義者はその当時から、君たちの主張は自壊的だっていう批判をよくされてます。つまり、「あなた方は『全ては確かじゃない。これは真とは限らない』と言うけども、その主張に関しては君たちは真理だと思ってるじゃないか、という具合です。この種の批判に対する応答がこの一節です。「例えば、火は薪を燃やし尽くした上で、いっしょに自らをも消滅させるし、また浄化剤〔下剤〕は身体から水分を排出した上で、いっしょに自らをも押し出すのであるが、それと同様にして、証明に反対する議論もまた、あらゆる証明を否認したのちに、いっしょに自らをも無効にすることができる。」。

アドが先ほど触れていたのはこの箇所ですし、あるいはモンテーニュもピュロン主義にすごく影響を受けていて、この下剤の比喩を用いています。そして、この比喩に後に、セクストスとはこう続けているんですね。「それにまた、ちょうど何か梯子を使って高い場所に昇った人が、昇り切ったあとで、その梯子を足を用いて引っくり返すということが不可能ではないように、懐疑主義者が、「証明は存在しない」を示す議論を何か踏み台として用いて、課題となっていることの立論にまで進んだ上で、それからその議論それ自体をも否認するというのは、ありそうにないことではないのである。」

池田：あれ、これもウィトゲンシュタインそっくりじゃないですか。

古田：まさに『論考』の比喩と全く同じことを 1800 年ぐらい前に言ってるわけですね。「ありそうにもないないことではない」という最後の言い回しは、いかにも懐疑主義者という感じですが、ともかく、梯子の比喩がぴったりと一致している。おそらくウィトゲンシュタインはこの古代懐疑主義の議論は知らなかったはずなんですね。そういう意味では、何か直接的な影響関係があるっていうんじゃなくて、むしろそれよりもっと興味深いのは、全く影響関係がないはずのに、同じ議論や同じ比喩が反復されているということです。

池田：そうしたことをアドが見いだしていくという。

古田：そうです。そういうことです。アドは、そういう意味では、卓抜な哲学史家・思想史家なので、すぐに分かってしまうんですね。これがやっぱり恐るべきことでありわれわれにとって非常に貴重というか、非常に面白いところでもあるわけです。

池田：アドが見るとウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』はゲーテとか、さまざまな古代哲学のアイデアと非常に近いものに見えてきて、実際見てみると本当にウィトゲンシュタインが言っているような言葉を哲学史の中から拾い上げることができる。

古田：そうですね。【1-8】とかは否定神学の言説なのですが、これ、しゃべりましょうか。時間だいぶたってます？　大丈夫ですか。

池田：どうしましょうね。ちょっと一回切りますか。

古田：切りましょうか。

池田：少しまとめますと、アドのウィトゲンシュタイン解釈の特徴としては、まず、「驚き」ということに注目して『論理哲学論考』の思想を際立たせたということ、それから普通は後期の『探究』についていわれるような治療的機能を『論考』にも見いだしたということがあるわけですよね。

古田：うん。

池田：後者にインパクトがあるのは分かるんですけど、驚きを中心として『倫理学講話』や『論理哲学論考』を見るというのも新鮮なことなのですか。

古田：『論考』に関してはそうではないかもしれません。『論考』を素直に読むと、まさに世界があるというそのことが神秘なんだとか、そういう言い方は出てくるので受け入れやすいんですけど、むしろ後期にそういったものを見いだすほうが難しいかもしれないです。それから、前期のほうの驚きの感情っていうのは、没利害と無関心という二つの構えに結びついている。

池田：そこが大事ですね。

古田：はい。ひとくちに「世界があることに驚く」といっても、例えば後期の場合には、現実を前にして驚くことは、まさに関心をもつ構えに結びついていると思います。

池田：そうすると、前期に関しては【1-1】にあるような驚きといってもある種の無関心とも共存している、と。この点についてストア派的な音調といわれているようなものをアドは取り出しているということですか？

古田：そうですね。

池田：なるほど。ありがとうございます。さっきの合田さんの話にも関連することですが、

資料の【1-6】で例の「語りえないものについては沈黙しなければならない」にちょうど今たどり着きました。先ほどの合田さんのお話だと、この語りえぬものというものに対して、レヴィナスや、あるいはアドルノが反駁しようとしたということだったんですよね。

古田：ええ。

池田：それは、結局、語りえないものについてのこの言説をどう捉えるかということにもなるんでしょうけど。

古田：そうですね。アドが正しく読み取ってるように、『論考』終盤のウィトゲンシュタインの一連の言葉というのは、まさに古代懐疑主義者がやってるような言い方なんですよね。あるいは、神秘主義者、否定神学者が言ってるような。

つまり、語ること自体がある種の境界侵犯であるということを自覚しながら語っている。自分の言葉が自壊することをはっきり自覚しながら語っている。アドによる懐疑主義や否定神学を引きながらの解釈というのは、それを裏付けてるというか、説得的に示していると思います。

池田：なるほど。ではここで、合田さん、さっきの話に戻りたいと思いますが、いかがでしょう。

合田：まさに反駁になってないんじゃないかということでレヴィナスのことやアドルノのことは紹介させていただいたわけですけれども、今、古田さんのおっしゃったとおりだと思うんですね。アドルノはウィトゲンシュタインの名前を挙げておりますけれども、レヴィナスのほうは別にウィトゲンシュタインという名前は挙げておらず、その問題は恐らく深いところで懐疑論をレヴィナスが『存在するとは別の仕方で』で語る理由ともつながっていたんじゃないかなというふうに私は思っておりますね。もしよろしければ Bild の話をさせていただきたいんですけど、いいですか。

池田：はい。

合田：先ほど非常に的外れな発言と思われたかもしれませんけれども、Bilderverbot というんでしょうか、「像の禁止」という観点から、アドルノ、レヴィナス、そして更にはウィトゲンシュタインも考えることができるのではないかということを申し上げました。

像の禁止というのは、逆に言うと、今、古田さんがおっしゃったように、さまざまな像しかないということですよね、存在してるいるものはすべて像である。この点で想起されるのは、これまたミスリーディングの可能性があるんですけれども、例えばパスカルが「charité

に至らざるものはすべて figure である」と有名な言葉を残してます。charité だけが figure ではない。だけど、逆に言うと、charité 以外はすべて figure である、ある意味では figure しかないんだと。世界全体が figure であると言ってもいいでしょう。それと同じことを Bild についても言えるのではないかと思っていたところ、古田さんの書いたウィトゲンシュタイン論では、Bild が一体どういうものなのかという点について非常に力のこもった叙述がなされているのに気づきました。ウィトゲンシュタインの哲学について前期と後期というのがあるのかどうか、それすら私には分からないのですが、前期の像の概念と後期の像の概念、この相違について NHK ブックスの『はじめてのウィトゲンシュタイン』のほうでも語っておられますね。その際、古田さんは Modell を「模型」と訳しておられる。

古田：はい。

合田：前期の像概念も「模型」ということで説明しておられます。もちろんご存じでしょうが、『論理哲学論考』では「像」に関して音楽の比喩が出てくるところがあります。『論考』の 4・014 ですかね。ここなんか、私、どういうふうに考えていいのかなと思うのですが、レコード盤、それから……、楽想というのは musikalischer Gedanke ですか。更に楽譜、そして更に Schallwellen、音波ですよね。こういったものがすべて、言語と世界の間の写像的な内的連関のうちに存していると。音ということで申し上げますと、例えば、レヴィナスも image の音楽性っていうことを非常に早い時期に、48 年に出た「現実とその影」という論文のなかで語っていて、そこから「リズム」というテーマを引き出しています。そもそも「イリヤ」も「リズムの断絶からなるリズム」と定義されていたのです、「像」というとなんとなくわれわれは視覚的なものをすぐ考えてしまうんですけれども、何よりもそのことが問題ではないか。少なくともレヴィナスとウィトゲンシュタインは聴覚的なものを考えているのではないか、そう思っているわけです。

今、読み上げた一節はなんかすごい箇所だなと思うんですよ。例えば「レコード盤」が出てくる。レコード盤が像だって……。レコード盤に溝が刻まれている、そういうことを示唆しているのでしょうか。「ヒエログリフ」への言及もありますよね。そういったものが相俟って、それこそ「グラマトロジー」みたいなものが考えられてるのかなとも思うし、レコード盤と楽譜、音波、それから繰り返しになりますが「音楽的な思い」〔楽想〕、Gedanke ですか、これも何かの写像だと言われると、一体、ウィトゲンシュタインってどういうふうに世界を捉えていた人なんだろうという大きな疑問が湧いてきます。

素人の強みでいろんな箇所を見て面白いなと思うところをピックアップするわけですけど、日記を見ていくと、ブラームスのオーケストラの響きの色は、道標、道しるべの色であるとか、ベートーベンのメロディーとモーツァルトのメロディーは違った顔をしているとか出てくる。このような叙述は一体何を意味してるのか、それを今日はお伺いしたいなと思っているのですが、いわゆる「共通感覚」「共感覚」を想起させる言い方で、非常に気にな

っていたんですね。

それから、「音波」というところも非常に面白いと私は思っております。ヘルツの『力学原理』の影響を専門家の方が語っておられるので実際に見てみたのですが、ヘルツの『力学原理』ってまさに Bild なんですよ。初めて知りました。例えば、ある装置において火花が発生する。それはまさに電磁波の像なわけです。Bild なんですよね。そういうものも Bild という概念には含まれているのかなということを素人なりに感じておりまして、そうすると、Bild という概念は従来の解釈では捉え切れない面を今なおも持っているのではないかなという気がするわけです。

例えば、自分、自己、あるいは脳と心と言ってもいいかもしれませんけど、そういうものも例えば Bild なのか。『論理哲学論考』の最初の命題ですが、英語だと case と訳しているけど、ドイツ語では Fall ですよね。変な言い方だけど、落ちてくるものっていうか、fallen。だからこそ人は驚くのでしょうけれども、そういう非常に独特な像の世界を描いている。この像の世界は――像ならざるものというのがあると言ってはいけないのかもしれないけれども、明らかに像しかないんだけれども――これは「像の禁止」を踏まえた形になってるんじゃないか、まさに妄想していると笑われるかもしれないんですけども、ずっとこの点を考えあぐねているわけです。そのあたりは、例えば英語の picture、picture theory というような言葉ではちょっと捉えられない。例えばスラッファがらみのエピソードで、ウィトゲンシュタインが picture theory を彼が放棄したみたいなことがまことしやかに言われてるけれども、そのようなものとはかなり異質なものを Bild という言葉は含んでるんじゃないかと。非常に優秀な方々が、例えば箱庭とかマップ、地図とかを例に出されていて、もちろんそれも像だと思いますけれども。私はちょっと自由すぎる読み方をしてるのかもしれないんですが、それだけでは解決できないと思っておりまして、この点をアドなんかはどこかで感じ取って、否定神学の話をしているのではないか。今日はせっかくの機会なのでその質問をぜひさせていただきたいと思っていたんですけれども、申し訳ありません、突然変な質問ですけれどもお考えを伺えれば幸いです。

古田：ありがとうございます。すごく面白くて、難しい。多分、ウィトゲンシュタインをどう考えるかって根本的なところですね。私は先ほど紹介した本で、Bild をキーワードにして読み解くっていうことをやったんですけど、やっぱり図式的になったのは否めません。『論考』でウィトゲンシュタイン Bild というのを、真か偽の値を持ちうる模型、世界の事態の模型として位置づけているんで、このこと自体は恐らくは間違いないだろうと思うんですね。方式というか、大きな。

合田：そうだと思います。

古田：ただ、まさにおっしゃったとおりで、彼は像（Bild）の一種としてレコードとか楽想

とかも挙げているんですね。写像関係にあるものは真偽の値を持ちうるものじゃないといけないはずなんだけど、そういうものも挙げている。

つまり、交響曲に真偽があるのかって話ですね。その時点で既におかしい。だから、本当は、ある種、彼の思想をそれとして全体を受け取ろうと思ったらもっとちゃんと考えなくてはいけなくて、今まさにおっしゃったように、アドは、そのあたり、前期と後期をどこかシームレスに捉えてるところがあるかもしれない。逆に僕は、『はじめてのウィトゲンシュタイン』の中では、前期の Bild っていうのはそういう真か偽の値を原理的には持ちうる模型として位置づけて、後期は変わったんだと主張しました。つまり、後期では像の捉え方が変わって、ある世界に対する何か漠然とした見方というか、世界をある曖昧な相貌のもとで捉えることとして位置づけたんだ、と主張したんですね。

今、合田先生がおっしゃった話の流れで言うと後期のほうがうまく合う。つまり、われわれは世界を何かしらの相貌で見ないわけにはいかないので、そういう意味では全て像になる。

合田：うん。

古田：だけども、何かそこに残余があるっていうか、全ては特定の像で捉えるしかないっていうことのうちに、何かわれわれはそこに欠けてるものを感じる、あるいは、そこから漏れ出る余剰を感じる。そっちのほうが厄介なんですよね。だから、むしろ前期の収斂していくほうのほうがむしろ、ある種、御しやすいというか、もっと易しく見せてくれるっていうんでしょうか、像の向こう側みたいなものを。

そういうことなのかもしれない。僕自身、よく考えるんですが、例えば後期において語りえないものはどこに行ったんだろうって思うんですね。例えば、熊野純彦さんが短いウィトゲンシュタイン考の中で、後期は一切を言語ゲームとして捉えるようになったとまとめておられます。そうすると、例えば神については「神」という言葉をめぐる言語ゲーム、あるいは世界の存在についてはやはりその言葉をめぐる言語ゲームが成り立つと。だけど、ある意味では神とか世界の存在そのものっていうのは言語ゲームのどこにも場所を持たない。そう指摘しておられて、僕もそう思います。それらはどこに行ったのか。前期ではむしろ非常に明確に、まさに語りえないものとして打ち出していた一連のものたちが、後期においては、繰り返すように、どこに行ったんだろうというのがずっと関心としてあります。全く答えにならなくて申し訳ないんですが、つまり、前期の像概念を非常に分かりやすくというか、図式的に、ある種、箱庭のようなものとしてのみ捉えることによって見えにくくなっているものがあるんだろうと思います。

池田：ちょっといいですか。

古田：はい。すいません。

池田：前期では像というのを模型として捉えて、それは基本的には真偽の値を持つような事態の模型である、ということですね。

古田：そうですね。

池田：まさに合田さんが出したような音楽の例はこの枠組みをいわば超えてしまうところだ、と。

古田：超えています。明らかに超えてますよね。

池田：で、後期になればより……。

古田：後期になれば、たとえばレコードであれば、音楽をある特定の指揮者なり演奏家たちが特定の相貌の下に捉えてそれを刻みつけた溝っていうことになるので、後期の像概念にはある意味ではうまく合うというか、むしろ回収できそうな気もしますが、難しいですね。

池田：後期の話になってきたので、せっかくなのでそのあたりにも触れたいと思います。アドのこの本は最初にあったように『論理哲学論考』と『哲学探究』について書かれているものですが、『哲学探究』、後期のウィトゲンシュタインについてのアドの解釈にはどういう特徴があるのでしょうか。

古田：今、ぎゅっとうまく言えないまま議論になってるところとちょっと離れちゃうんですけど、今回、お配りした資料の 3 ページ目以降なんですが、後期に関しては、アドにとっては別の仕方で重要だったっていうふうに捉えたんです。今、合田先生のお話を聞くとそれも単純化し過ぎかなって思えてきたんですが。

ともあれ、どういう意味で重要かというと、前期ウィトゲンシュタインの思想からアドは自分のある種の宗教的な感覚、あるいは経験も含めて世界に対する驚きに対する、ある種、決定的な表現を与えられたというんですね。後期に関しては、哲学とは何なのか、哲学とはどういう営みなのか、これは今日の『生き方としての哲学』にも関わると思うんですけど、哲学ってそもそも何なんだっていうことに関して後期ウィトゲンシュタインを読むことによって自分は初めて気付いたと、アドは語っています。

ちょっと抄訳すると……。これ、長いところですけど、【2-3】を読んでおきたいと思います。

「言語についての革命的と言ってよい分析が『哲学探究』のなかで展開されており、この

分析は当時、どうしても言っておかねばならないが、私の哲学的省察の中に転覆を引き起こすものだった。哲学史家としての私の仕事に関しても、数々の新たな展望があますところなく私に対して開かれることにもなった。突如として私はウィトゲンシュタインの次のような主要思想を発見し、そしてそれは私には異論の余地のないもので、計り知れない帰結を引き起こすものだった。すなわち、言語は、対象を命名したり指示したり、あるいはまた思考を翻訳することを唯一の課題としているのではなく、ひとつの文を理解するという行為は一般に考えられているよりもはるかに、音楽の主題を理解すると通常呼ばれているものに近いのである。正確に言うと、かくして言語「というもの」は存在せず、複数の言語ゲームが存在するのであって、それらは、ウィトゲンシュタインが言うには、ある一定の活動、ある具体的状況、ある生活の形式という展望の中に、常に位置づけられているのである。この考えは、私に突きつけられていた、いや、私の同僚たちの多くにも突きつけられていた問題、古代の哲学的著者たちの顕著な支離滅裂さという問題を解くのに大いに私の役に立った。」。

これは、プラトンの対話篇をちゃんと読もうとする者みんなが思うはずのことですよね。対話の相手は何でこれで納得しちゃうんだろう、ということです。全然ちゃんと論証できてないのに、とか、前に言っていることと今言っていることが変わっちゃっているのに、とか。相手は何で、「なるほど」とか「それに間違いありません」とかってうなずくんだろうっていう。この問題について、アドはこう続けています。

「……古代の哲学的著者たちの顕著な支離滅裂さという問題を解くのに大いに私の役に立った。これらの著者たちの第一の関心は、読者たちに諸概念の配置についての情報を与えることではなく、読者たちを育成することであったと当時の私には思われた。「手引き」（エピクテトスのそれのような）の類いでさえ、修練についての論集であった。そこで哲学的言説というものを、それらの言語ゲームの中に、言説を生み出した生活の形式の中に、ひいては個人的もしくは社会的な具体的状況の中に、言説を条件づける実践の中に、また、これらの言説が産出させたいと欲していた効果との関連で、改めて位置づけなければならなかった。このような視角において、私は霊的修練なるものを語り始めた」。

池田：この霊的修練は霊操と呼ばれるものと同じですよね。

合田：うん。ロヨラかな。

池田：こういうふうにして、アドは、後期のウィトゲンシュタインにどういうふうな生き方としての哲学をイメージするかを考えるなかで、『哲学探究』と古代の哲学的な著述との近さを見いだしていった。そうしてアドのなかで霊的修練などが中心的な概念になっていったということですよね。

古田：もう一つだけ。あと、【2-4】をちょっと紹介しておいて終わりにしたいと思うんです

けど、いまの話に極めて密接に関連することですが、アドは次のようなことを言うんですね。

「……根底的な変容が生じたのは、何よりも印刷術によってである。書かれたものが発話に対して優位に立つ。哲学的言語ゲームは、生きた発話の谺である代わりに、ただちに読まれる定めにあるという事実によって変容された。あらゆる修辞学的で教育学的な要素、あらゆる不確実性やためらい、話された言説の繰り返しは次第に除去され、即座に教義そのものを提示しようとする。しかし、同時に、もはや具体的な一人の聴取者を説得するのではなく、普遍的聴取者、人間それ自体を説得せねばならない以上、絶対的な確実性の諸条件を確固たるものにすることが課題となるのだ。デカルトからヘーゲルに至るまで、このようなものが哲学者たちの主たる関心事だった。全面的整合性、没人格的理性にとっての普遍的価値、これこそが哲学がこれ以降、所有せんとするものであり、哲学は真に体系としての学説になる。哲学がそこで表現される文学的著述は体系的思考を前にして完全に消失し、哲学はこの体系的思考を正確に翻訳するものとみなされる。」

まさしくソクラテスとかキケロとかそういうあたりが想定されますが、「あらゆる修辞学的で教育学的な要素、あらゆる不確実性やためらい、話された言説の繰り返しは次第に除去され、即座に教義そのものを提唱する」――このあたりを読むと、後期のウィトゲンシュタインの例えば『哲学探究』がかなりの程度繰り返しによって成り立っていて、同じようなことを何度も何度も手を替え品を替え言うのはなぜなんだろう、というポイントにつながると思うんですけど、これは古代のテキストを読んでも思うことですよね。何でくどくどと同じことを繰り返すのかってことです。

これが、本が大量に刷られてすぐに方々に流通する、ということが一般化した社会になると話が変わってくる。そうなると、「あらゆる修辞学的で教育学的な要素、あらゆる不確実性やためらい、話された言説の繰り返しは次第に除去され、即座に教義そのものを提示しようとする」という具合になる。そして、「具体的な一人の聴取者」――つまり、聞き手ですね――具体的な聞き手を説得するのではなくて、「普遍的聴取者、人間それ自体を説得せねばならない」ということになる。そうなる以上、「絶対的な確実性の諸条件を確固たるものにすることが課題」というふうに、哲学の言説というか言葉自体が変容していったという、そういう分析です。最後まで読んでみましょう。

「デカルトからヘーゲルに至るまで、このようなものが哲学者たちの主たる関心事だった。全面的整合性、没人格的理性にとっての普遍的価値、これこそが哲学がこれ以降、所有せんとするものであり、哲学は真に体系としての学説になる。哲学がそこで表現される文学的著述は体系的思考を前にして完全に消失し、哲学はこの体系的思考を正確に翻訳するものとみなされる。」。

つまり、われわれがとりわけ近代以降に読む哲学的なテキストというものは、おおよそこういうものになったという分析を、アドは行なっています。

池田：そうすると、逆に言うと、『哲学探究』を現代のわれわれが見ると非常に異様なテキ

ストに見えるんだけど…。

古田：そうそう。ええ。

池田：しかし、アドの見方からするとこれは「生きた発話」であって……。

古田：そうですね。しかも、テキストの構造はまさに対話的なものです。対話相手として明確な登場人物が出てくるわけではないけれども、常に誰かと対話してるんですよね。

池田：不確実性、ためらい、言説の繰り返しといったものが『哲学探究』には何度も出てきて、誰かを教育しているようだけれど、それが誰かはよく分からない。独り言のようでもあり、自分となのか他人となのかもよく分からないけど、とにかく誰かと話している。

古田：そうですね。

池田：そういうふうに『哲学探究』のスタイルが見えてくるっていうのはすごい大事じゃないですか。

古田：すごい大事です。

池田：すごく解明感がある。

アドのハイデガー解釈

池田：ところで、少し時間を気にする必要がありますね。最後に質問を受ける時間を確保したいと思いますので、どうしますかね。私は……。

合田：ハイデガー。

池田：ええ。ハイデガーについてのアドの解釈は結構面白いのでそれについてやはりお話ししましょう。

　先ほどの合田さんのお話にジャン・ヴァールという人が何度もフランス現代思想における重要な人物として出てきました。実はアドはこのヴァールの下でハイデガーかリルケについての博論を書こうとしていた。これがアドの最初の希望だったんですよね。私の資料の

ほうも簡単に見ておきますと、資料の【1-1】では、言語の限界が私の世界の限界であるというウィトゲンシュタインの話が出てきた後に、ハイデガーの「忘れがたい表現」と呼ばれるものが出てきます。それは、「われわれが泉に向かうなら、その際、森を通るなら、われわれは泉という語を通して、そこに赴くのだ。たとえこれらの語を発しないとしても、たとえわれわれが表現されうるものを何ら思考していないとしても」というものです。この表現の出所を調べてみると、実はハイデガーのリルケ論なんです。実に単刀直入なタイトルの「何のための詩人たちか」という論考がその出所です。【1-2】にある「言葉とは区域（テルプルム templum〔聖域・神殿〕）、すなわち有ることの家〔das Haus des Seins〕である。言葉の本質は意味指示で尽きるものではないし、また言葉は有ることの家で有るが故に、それ故に我々は絶え間なくこの家を通って行くことによって有るものに到達する」という文章の後に、先ほどの「泉の」という表現が出てくるんです。

合田さんの解説にも出てきたんですけども、なぜアドはヴァールの下でリルケとハイデガーについて論文を書きたいと思ったのかというと…。ちょっと飛ぶんですけど、資料の【2-5】のほうを見てもらうと、リルケの『悲歌』が出てきます。悲しい歌と書く。

合田：『ドゥイノの悲歌』。

池田：ですかね。アドは、バールのもとでリルケとハイデガーについての論文を書きたいと思ったのは、「リルケの『悲歌』は、自分が『存在と時間』で言おうとしたことを詩の形で表している、とハイデガーが言っているからです」と言っています。ハイデガーがこのことをどこで言っているのか私は分かってないんですけど、とにかくアドはこういうふうに言っている。

あと、ハイデガーとウィトゲンシュタインと言ってもぴんとこない人のほうが多いと思うんですけど、例えば、【1-3】のポール・スタンディッシュという人は、さっきのようなハイデガーの語とか言葉についての考えについて、泉という言葉を学んだから泉という概念を通して物を見るということではなくて……。詩人が物を名付けているんですね。詩人がそれを泉と呼ぶ、それによって泉がそこに顕現するというか。スタンディッシュは、そういうふうな捉え方でスタンディッシュはハイデガーとウィトゲンシュタインを近いものとして読んでいる一人ですよね。

古田：今の 2 つの違い、もうちょっと説明してもらえると。

概念を通すんじゃなくて、命名によってある種立ち現させるという、その両者の違いはどのあたりにあるんですか。

池田：これは難しいんですけど、例えば、私が一番気に入っているのは、ものすごいシンプルな言葉、物とか、ドイツ語でいう Ding のような語によって身の回りのものを名指すとい

うようなことをハイデガーがやっていること。そこで起こっているのは、物についての既定の概念を学んで、その概念によってその存在者を見るということではないですね、恐らく。いやむしろ、物のようなあまりに単純な言葉で周知のものを名指すことによって、従来の概念理解では見えなかったような仕方で現れてくる、その存在が。今言ったようなことが、この場面で出てくる泉に関してどうなっているのかは細かくは分からないですけど……。

古田：典型的には、例えばデュシャンが小便器を持ってきて、とんって置いて、「はい泉」だとかって言うの、そういうのは関係するんですか。

池田：あり得るけど…、ハイデガーがここで考えているのはリルケのような詩人ですよね。まあたしかにデュシャンの泉を例に用いる人がいてもおかしくはない。

ところで、ウィトゲンシュタイン自身はハイデガーについて【1-4】のようなことを言っている。古田さんが『ウィトゲンシュタインと言語の限界』の解説でこの箇所に触れていますね。「私は、ハイデガーが存在と不安について思考していることを、十分に思い遣ることができる。人間は、言語の限界に向かって突進する衝動を有している」というウィトゲンシュタインの言葉です。【1-5】は「形而上学とは何か」への後記に出てくる文章ですが、「形而上学とは何か」ではまさに無と不安が問題であり、ウィトゲンシュタインはこれを読んだんでしょうけど、ハイデガーもそこでの問題はまさに言語を何らかの限界において話すことだったと言ってるんですよね。

先ほど論理実証主義的なウィトゲンシュタイン観が出てきましたが、その種のウィトゲンシュタイン観が強かった時には、ハイデガーとウィトゲンシュタインはそれこそ水と油のように思われていたんではないかと思うんですけど、例えば【1-6】のリチャード・ローティからの引用にあるようにハイデガーとウィトゲンシュタインを近付けて見ることは、今のわれわれにとってはそんなに違和感があることではないと思う。ローティはハイデガーやウィトゲンシュタインを啓発的哲学者と呼んで体系的哲学者から区別するんですね。ローティは、「体系的大哲学者は、大科学者と同様に永遠性をめざして建設する。啓発的大哲学者は、彼ら自身の世代のために破壊する。」と言う。「体系的哲学者」には、当然、論理実証主義者も含まれます。しかし、ローティによると、ウィトゲンシュタインはこっちの陣営に入るんではなくて、ハイデガーと一緒に「啓発的哲学者」のほうに入る。ローティの言い方では、「啓発的哲学者の願いは、詩人が時折垣間見せてくれる驚き――この世にもまだ新しい何かがあるという驚き――の感覚のために、余地を開けておくことである」、と。この箇所はさっき古田さんが強調していた点にもかなり関わりますよね。ローティは啓発的哲学者の典型としてウィトゲンシュタインとハイデガーを挙げるんですが、アドを通じてあらためて見てみると、こういうローティの解釈にもだんだん違和感がなくなってくるんです。でも、20 年前だったら真面目に受け取られないですよね。ハイデガーとウィトゲンシュタインのこのような接近は。

古田：はい。しかも、【1-4】にあるように、アドは自然とハイデガー引いてるんですよね、ウィトゲンシュタインについて議論しながら。アドはウィトゲンシュタインの議論から自然にハイデガーの泉を巡る議論につなげてるんですけど、ただ彼は当時、ウィトゲンシュタインがハイデガーについてある種好意的に言及していることは知らなかったはずです。

池田：そうか。それもまた。

古田：それも、哲学史を深く理解するっていうことのある種のすごみっていうんですかね、それをよく感じますね。

池田：なるほど。どうぞ。

合田：少し情報を提供しておくと、アドは 1954 年だったかな。ハイデガーとプロティノスの論文を書いてるんですね。ほぼウィトゲンシュタインを発見したのと同じ時期にそれを書いてる。先ほどの池田さんが言ってたのはリルケの『ドゥイノの悲歌』の第 7 かな、そこのところを確かどう訳すのか話をしてたと思うんですけど、『ドゥイノの悲歌』はおそらく非常に有効かもしれない。先ほどの語りえないものの話とか現象の話とかにもつながれる非常に有用な作品じゃないかなと思います。

池田：『ドゥイノの悲歌』は私の資料の【2-6】に載っているものですね。

合田：うん。

池田：【2-2】を見ると、アドが哲学とは世界の知覚を変貌させるものだっていう古田さんのウィトゲンシュタインの基本的な理解とほとんど同じようなことを言っているんですけど。

古田：そうそう。

池田：しかし、アドによると「私はハイデガーを読んでこういうことを考え始めた」、と。つまり、ハイデガーが「ひと」と称するものと「本来的」と称するほどまでに高められた 2 つのレベルについて、アドは「言葉では表しようがないことがあると感じて、自分の経験をあえて誰にも語ろうとしなかったのはこのとき以来でした」と言うんですね。本来的なあり方というのは、【2-3】にあるように不安とか有限性の意識というものに関係していて、アドはこれを「実存するという事実が持つ謎ゆえの不安」と呼んで、そこに先ほどの「言葉では表しようがないこと」の次元を読み取った。これに続けて、「ハイデガーが行なったこの分

析は相変わらず妥当であると私には思われ、大きな影響を受けています」と言われている。アドがハイデガーとウィトゲンシュタインを非常に近いものとしてずっと見ていることが分かりますね。